

あはな
ぐに

スーホーの
白い馬



モンゴルの民話
イラスト 川上 和生

昔、モンゴルの草原に、スーホーといううますしい羊かいの少年が、おばあさんと二人でくらしていました。

スーホーの仕事は、毎朝、早く起きて、かつていたくさんの羊たちを、えさの草がある草原につれていいくことでした。

ある日のこと。

スーホーが、もう日がくれるのに帰つてきません。



おばあさんが心配していると、何か白いものをだきか
かえたスーホーが帰つてきました。よく見ると、それ
は生まれたばかりの、雪のように真っ白い子馬でした。

おばあさん「どうしたんだい、その子馬。」

とおばあさんが聞きました。

スーホー「一人ぼっちでたおれていたんだ。

母馬もいなかつたから、オオカミに食べられたら
かわいそうだと思つて、つれて帰つてきたんだよ。」

スーホー「おまえの名前はツァスにしよう。」

ツァスというのは、モンゴル語で「雪」という
意味でした。



そして、子馬だったツアスは、
美しい白馬に育つていきました。

スーエーとツアスは、とてもなかよしで、
スーエーが出かけるときは、かならず
ツアスもついてくるのでした。



ある夜のことです。

(ヒヒーン！パカパカ…)

スーホー「ツアスの声だ。

何があつたんだ：あつ！」

(オオカミとツアスが

戦う、うなり声)

ツアスが、大きなオオカミから大切な羊たちを守ろう
と、ひつ死になつてたたかつていたのです。

スーホー「わああつ！」

スーホーはぼうをふり回して、オオカミを追いはらう
と、ツアスの首をだきしめて、こう言いました。

スーホー「ありがとう、ツアス。これからもずっと、
ぼくとお前はいつしょだよ。」



ば

そんなある年の春、王様がけい馬の大会をひらく、
という知らせがとどきました。一等になつたら、
おひめ様と結こんできるというのです。

羊かい「スーホーも、ツアスにのつて、けい馬に出て
ごらん。ツアスならきっと一等になるよ。」

スーホー「うん。」



さあ、けい馬の開始です。

たくましい男たちがむちをふると、何十頭もの馬が、
緑の草原をいつせいに走り出しました。

(ドドドドドド…！－！)

はじめは後ろの方を走っていた白い馬が、ぐんぐんと
ほかの馬を追いぬいていきました。

もちろん、スーアーがのつたツアスです。

もう、追いつける馬は一頭もいません。

白いたてがみを美しくなびかせて、風のような速さで、
ゴールまでかけぬけていきました。

(パカッ)

(パカッ)

(パカッ…)



王様「白い馬が一等だ。のり手をつれてまいれ！」

と王様がさけびました。

ところが王様は、まずしい身なりのスーザーを見るなり言いました。

王様「おまえのような、みずぼらしい羊かいを、わがむすめと結こんさせるわけにはいかん。」

(王様が三まいの銀かを投げる チヤリーン)

王様「その白い馬をおいて、さつさと帰れ。」

スーザー「いいえ。このツアスはわたしの大好きな馬です。お金なんていりません。さあ、ツアス、帰ろう。」

王様「なに？ わしにさからうのか。こいつに思い知らせてやれ！」



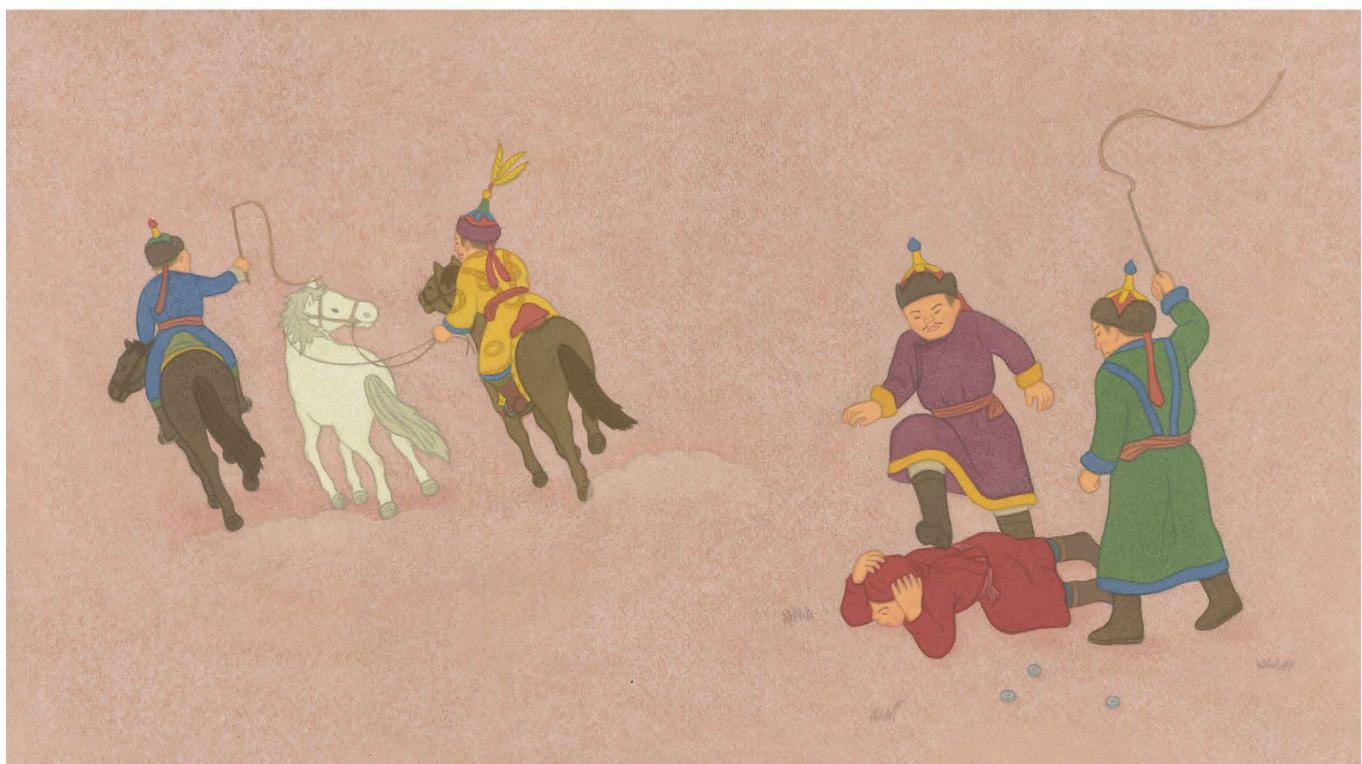
(家来がスーホーをなぐる、ける)

スーホー 「あつ、やめ…、ど、あつ…

ツアス、ぼくのツアス…」

スーホーは、おおぜいの家来になぐられ、けとばされ
て、気を失つてしましました。

王様につれていかれるツアスは、スーホーの方を
ふり向きふり向き、たづなを引かれていきました。



すばらしい白馬、ツアスを手に入れた王様は、
ごきげんでした。その日は、白馬をお客たちにじまん
するために酒もりをひらいていました。

王様がとくい顔でツアスにまたがったとたん…、

(ヒヒーン!)

王様「わああ！ …いててててて。」

ツアスはとつぜんあばれ出し、

王様をふり落としました。

風のようにかけ出します。

王様「あの馬をつかまえろ！

にげられるくらいなら、こうしてしまえ！」



(シユン、シユン、シユン！)

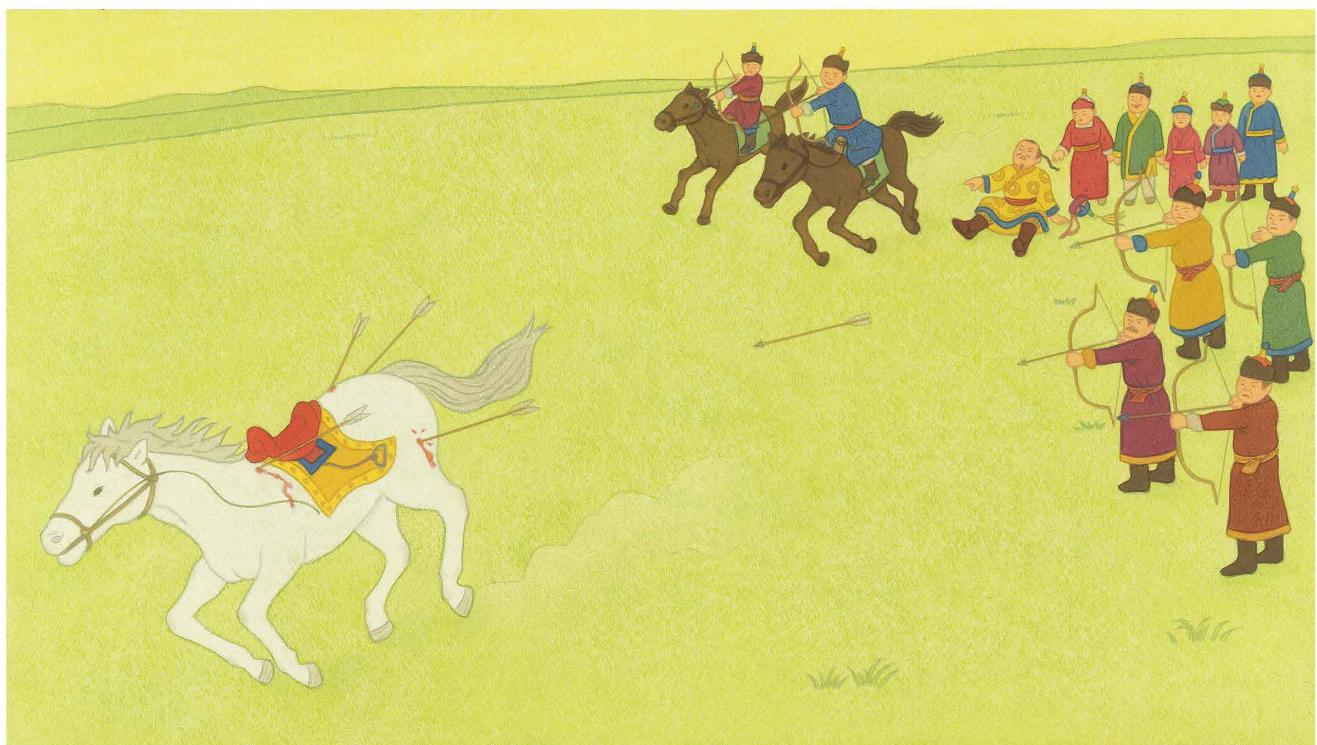
家来たちが放つた矢が、何本もツアスにささります。

それでもツアスは、休むことなく、大好きなスーサーに会いたくて、ただただ走りつづけました。

(パカッ)

(パカッ)

(パカッ…)



その夜、スーアスは、あやしい物音で目を覚ました。外に出てみると、赤い馬が立っていました。それは、血まみれになつたツアスでした。

スーアス「ああ、ツアス！

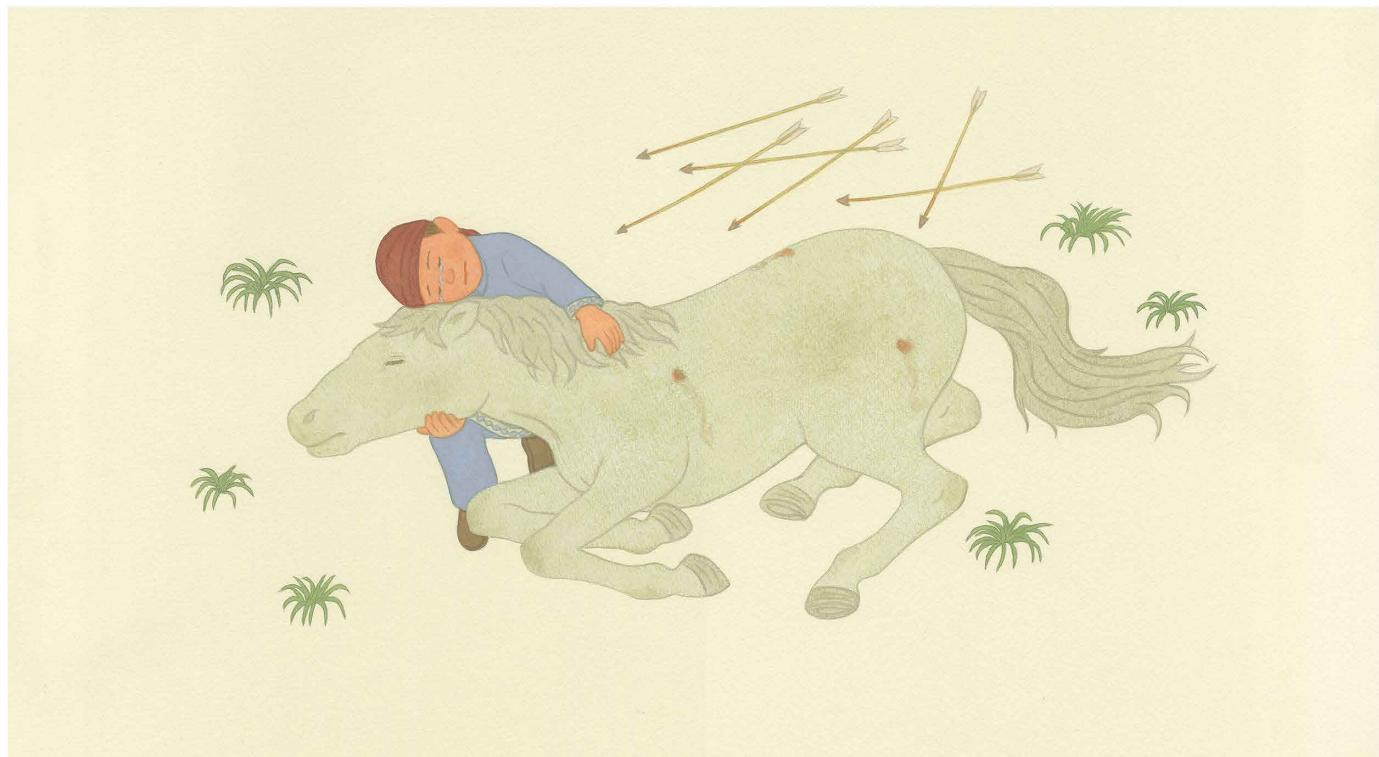
帰つてきてくれたんだね。こんな目にあいながら、ぼくに会いに来てくれたんだね……。」

スーアスは、ツアスの体にささつた矢を、なきながらぬきました。

スーアス「ツアス、死なないでおくれ！

ツアス、ツアス、

ツアス……！」



スーアーは、一日じゅうなきつづけました。

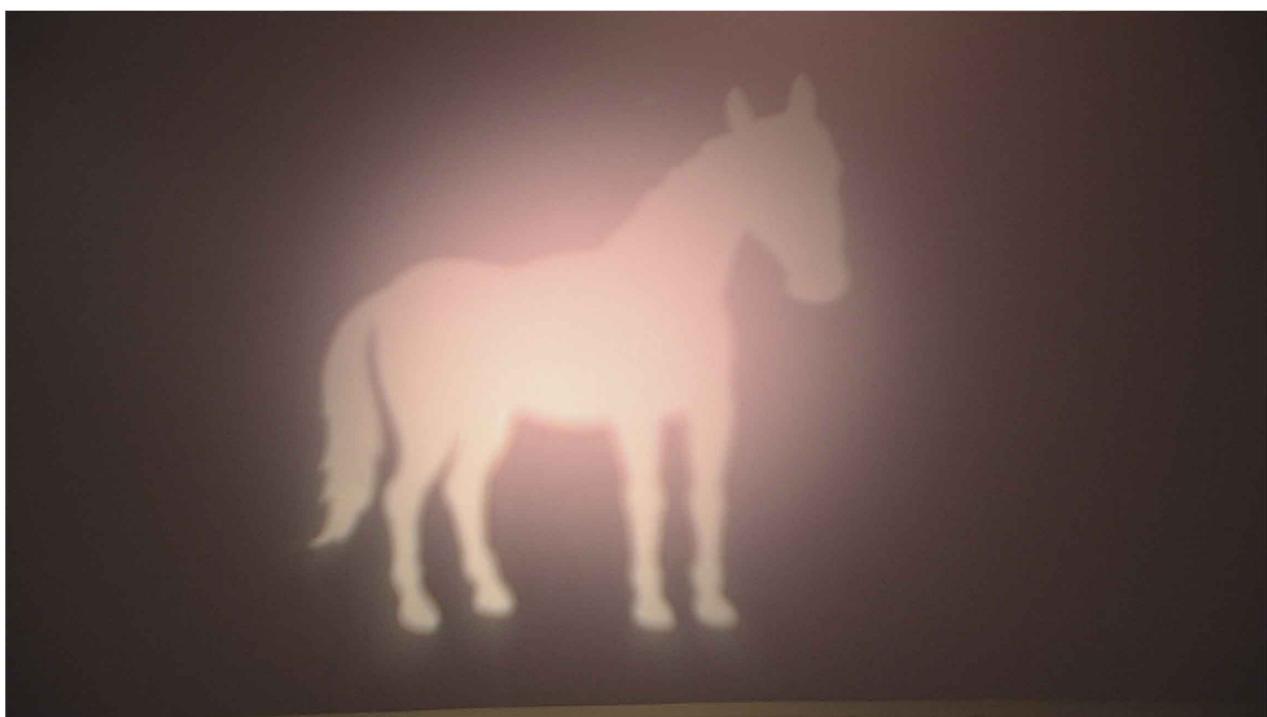
すると、なきつかれてねむってしまったスーアーのゆめの中に、ツアスがあらわれ、こう言いました。

ツアス「どうか悲しまないでください。

わたしの心は、いつもあなたといっしょです。

わたしのほねや皮やしつぽで、がつきを作つてください。そうすれば、わたしはいつまでもあなたのそばにいられます。」

スーアー「……。（うなずく）」



スーホーは、何日もかけて、そのがつきを作りあげました。

スーホーが、このがつきをひくと、ツアスのいななきの声や、ツアスが走るひづめの音がしました。

その音色を聞くと、ツアスにのつて草原をかけ回った楽しさや、ツアスとわかれた悲しさを思い出しました。

スーホーは、ツアスがすぐそばにいるような気がしました。



そして、そのがつきの美しい音色は、モンゴルの草原にくらす、すべての人々の心をいやし、なぐさめてくれるのです。

これが、モンゴルにつたわる

がつき「馬頭琴」のお話です。



お
わ
り